



さい帯血バンク NOW

2006年1月15日発行

日本さい帯血バンクネットワーク

発行者：鎌田薫(会長)

〒105-0012 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社東館6階

TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417

<http://www.j-cord.gr.jp/>

第27号

「2005年大阪発、さい帯血バンク推進全国大会」を昨年11月19日午後、大阪府立成人病センター（大阪市東成区）の講堂で開催しました。一般参加者も含めて100余名のさい帯血バンク関係者が一堂に会し、熱心な論議が繰り広げられました。

「展望」や「成績」 全国大会で報告

まず、主催者を代表して日本さい帯血バンクネットワークの鎌田薫会長が挨拶しました。続いて、来賓として厚生労働省をはじめとする5団体の代表から祝辞が述べられました。

この全国大会は、わが国のさい帯血バンク事業の年次報告会を兼ねています。最初の報告は「さい帯血バンク事業の実績と今後の展望」と題して日本さい帯血バンクネットワークの野村正満事業運営委員長が、この1年間のさい帯血バンクの活動報告と様々なさい帯血バンクをめぐる動向を報告しました。続いて甲斐俊

朗事業運営委員によるさい帯血移植の成績＝2～3面に詳細を掲載＝の報告が行われました。

さらに、京阪さい帯血バンク、兵庫さい帯血バンク、東海臍帯血バンクから、独自の取り組みについての報告が行われました。いずれの報告のあとにも、会場からの質疑応答があり、講堂内は終始熱気にあふれていました。また、いつもは顔を合わすことが少ない各さい帯血バンクのスタッフによる懇談があちこちであり、参加者は有意義な時間を過ごしていました。

年頭あいさつ

安全で有効な さい帯血提供 変化に的確に対応

会長 鎌田薫

日本さい帯血バンクネットワークは、今年で7回目のお正月を迎えることになりました。平成11年8月に発足した際に、5年間で2万個のさい帯血を保存・公開するという目標を設定しましたが、この目標は予定より早く達成し、現在では2万4000に近い数のさい帯血を公開するに至っています。これもひとえに皆さまの献身的なご協力のたまものと、心から感謝いたしております。

さい帯血移植医療も長足の進歩を遂げ、発足当時には小児の血液疾患について骨髄移植を補完するものと考えられていましたが、現在では毎年700件近いさい帯血移植が行われ、骨髄移植と肩を並べるに至っていますし、大部分が成人に対して移植されるようになってきました。そのため、さい帯血バンクネットワークでは、より細胞数の多いさい帯血をより多く保存・公開することにしています。

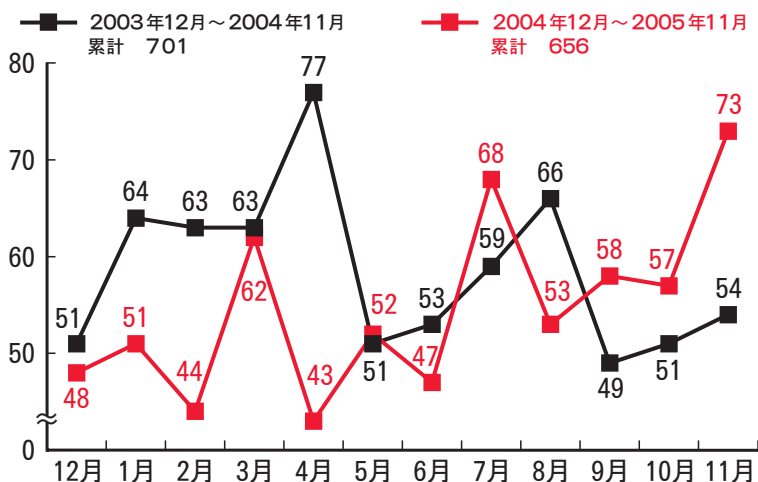
それ以外にも、幹細胞バンクの発足や再生医療に対する期待の増大、プライベート・バンク問題など、発足当初には予想をしていなかった事態が数多く生じてきています。今後とも、これらの変化に応じて、1人でも多くの患者さんに、安全かつ有効なさい帯血をお届けできるよう、業務の改善に努めていく所存です。

関係者の皆さまのさらなるご協力をお願い申し上げますとともに、ますますのご健勝とご多幸をお祈りします。

非血縁間さい帯血移植状況 (2005年11月30日現在速報値)

移植数(累計) **2704**

公開数 **24169**





3年生存率は27~39%

全国大会の報告内容——移植データ管理小委員会

さい帯血移植1860例の成績

1997年の第1例目のさい帯血移植から2005年10月末までに2600人以上の患者さんにさい帯血移植が行われました。現在までに、1860件（2004年の5周年の記念講演会では1000例の報告を行いました）の臨床調査票が各さい帯血バンクおよび日本さい帯血バンクネットワークに報告されており、今回はこの成績を紹介します。

1860例の内訳は小児例が663例、16歳以上の成人例が1197例（50歳以上が全体の27%）、疾患別では、血液悪性疾患が大多数を占め、急性リンパ性および骨髄性白血病が全体の54%、続いて骨髄異形成症候群14%、悪性リンパ腫12%に多く施行されています。その他、全体の5%以下ですが、成人T細胞性白血病、慢性骨髄性白血病、多発性骨髄腫と続きます。非悪性疾患（全体の9%、165例）としては再生不良性貧血、免疫不全症、血球貪食症候群、先天性代謝異常症等に行われています。

複数回移植401例

また、初回の造血幹細胞移植としてさい帯血移植が行われた患者さんが1459例ですが、2回目あるいは3回目の移植として行われた患者さんが401例あります。

初回移植、再移植例も含めた移植成績として、悪性疾患では27%、非悪性疾患では39%の移植後3年の無イベント生存率が得られています。無イベント生存率とは、生着不全や拒絶・自己造血の回復、再発がなく生存している率で移植が成功した率を表しています。

初回寛解は好成績

移植症例が半数以上を占める急性白血病について詳細にみてみますと、小児急性白血病の初回移植の成績では図1に示したように初回寛解期移植例で55%、第2寛解期移植例で44%の無イベント生存率が得られています。一方、寛解導入不能例や再発

期に移植を受けた症例の無イベント生存率は17%と成績は有意に悪くなっています。

成人では、50歳以上の高齢者や臓器障害を持つ患者さんの多くはミニさい帯血移植を実施されています（ここではRISTと表しています）。このミニ移植と、通常の高力な移植前処置を用いて移植が実施されたフル移植を分けてその成績を示したのが図2です。

フル移植の無イベント生存率（3年）は初回寛解期、第2寛解期では40%、56%ですが、非寛解期移植では18%、一方、ミニ移植では観察期間が短くハッキリとは言えませんが

初回寛解期移植の成績は良い傾向が見られます。

高齢者はミニ多く

骨髄異形成症候群(MDS)の患者さんは一般に高齢者が多くそのためミニ移植症例が多いのですが、フル移植では長期生存率が約50%、そのうち標準危険群（MDS-RA; 不応性貧血、および白血化後の初回寛解期）の移植では79%、高度危険群（標準危険群以外の病期の移植；MDS-RAEB、移行期や白血化後の初回寛解期以外の移植）の移植では43%の無イベント生存率が得られています（図3 = 3ページに）。

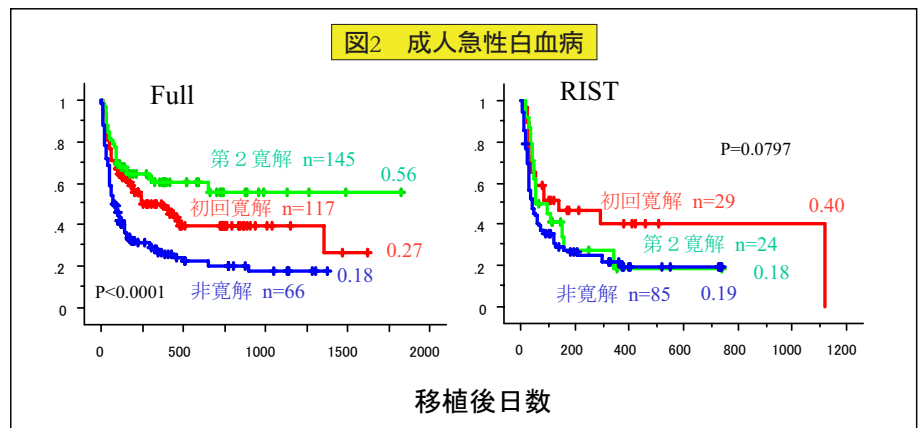
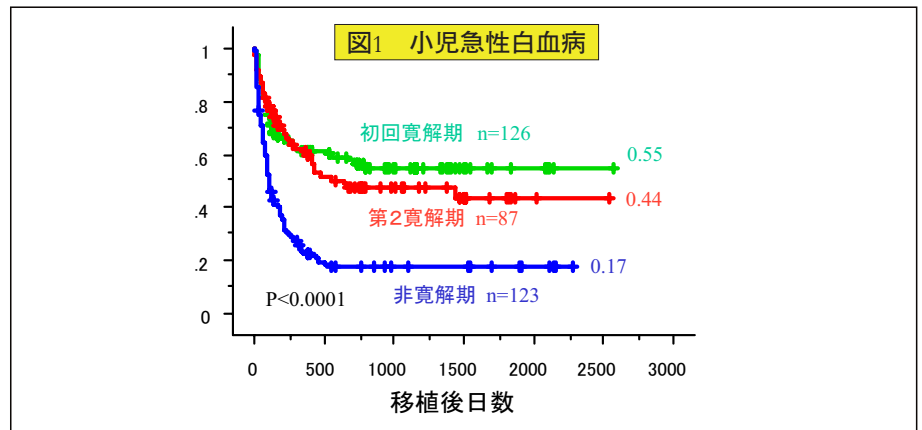
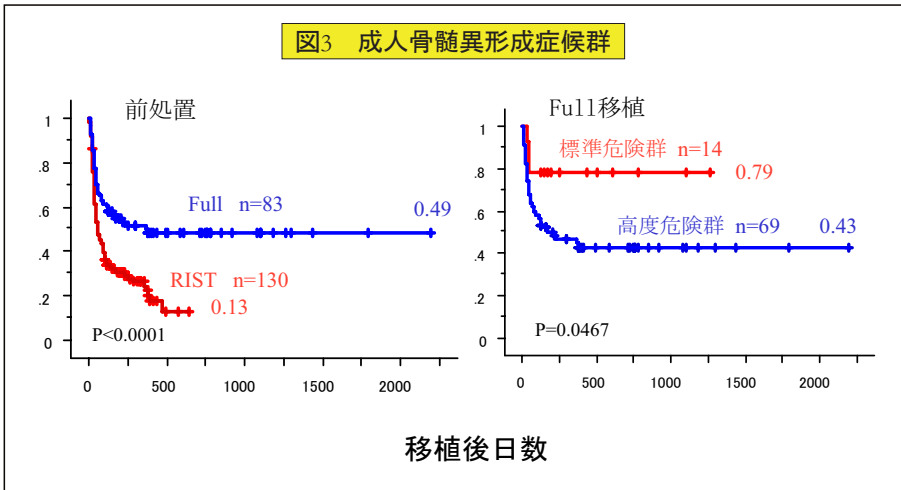




図3 成人骨髄異形成症候群

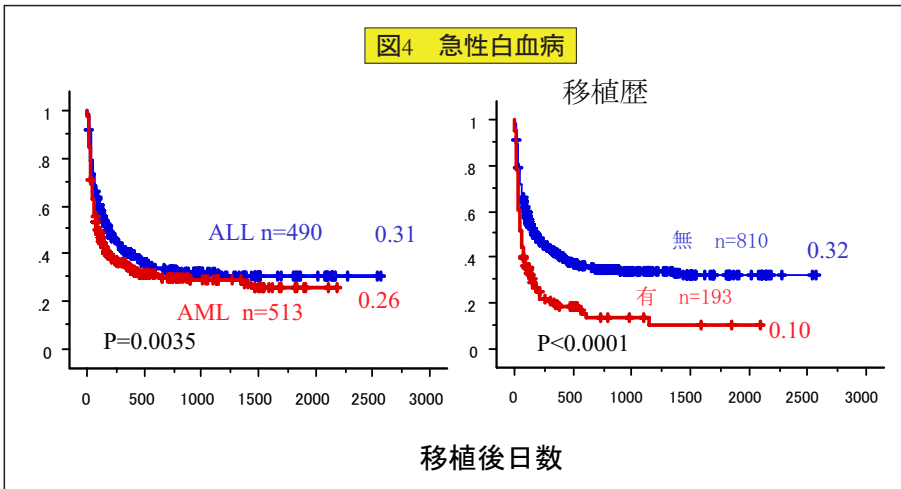


成人より小児良好

小児および成人を含めた急性白血病全体の成績を、ALLとAML（図4左）、移植歴の有無（図4右）、フル移植とミニ移植（図5左）、小児例と成人例（図5右）で分けた無イベント生存率を示しています。

それぞれの群に含まれている患者さんの背景や移植病期も異なり、統計学的にも多変量解析に基づく結果ではなく単変量解析の結果ですが、ALLはAMLよりも、成人に比べ小児のほうが良好な成績が得られています。

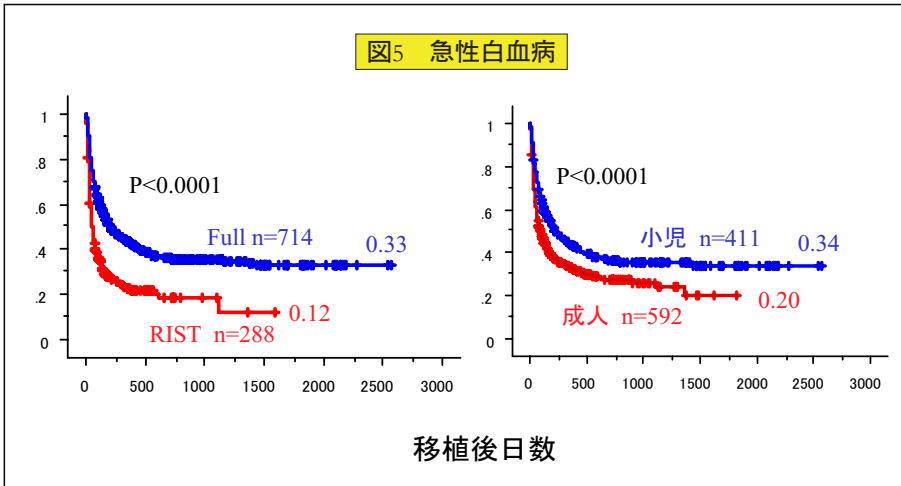
図4 急性白血病



詳細な検討必要に

また、移植歴のない群のほうがある群よりも、ミニ移植よりもフル移植のほうが良好な成績ですが、ミニ移植のほうに移植歴のある患者さんや高齢や臓器障害のある患者さんが多く含まれている等、一概に比較することはできず、今後の詳細な検討が必要です。

図5 急性白血病



報告する甲斐俊朗事業運営委員



すこやかに、幸せに。
明日への夢、描きたい。

NIPRO

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたい。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。

NIPRO

ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号



分離保存施設は2カ所

採取病院 訪問記⑪

中国四国臍帯血バンク

中国四国臍帯血バンクは現在、岡山と広島との血液センター内にさい帯血の分離保存施設を設置して、事業を行っています。採取施設は8施設ですが、岡山に3カ所、広島に5カ所と分かれていて、それぞれ独自の取り組みをしている部分も多いようです。昨年度は300ほどのさい帯血を保存して公開していますが、そのうち7割が岡山で、広島は残りの3割ほどです。今回、岡山と広島の採取施設をお訪ねして、お話をうかがってきました。

採取中に「声かけ」

岡山では最も採取数の多い三宅医院（岡山市大福）にお邪魔しました。三宅医院は小児科、内科、形成外科などの診療も行っていましたが、中心となるのは出産を中心とする産婦人科です。年間1000を超える出産がありますが、そのうち約半数という高い確率でさい帯血を採取しているそうです。



メルヘンチックな外観の三宅医院

実際に、妊婦さんにさい帯血の提供の説明をするのは助産師さんです。主任助産師の友野康江さんによると、提供を断られることはほとんどない

あ と が き

日本さい帯血バンクネットワークのホームページが公開されて間もなく5年になります。

当時インターネット上で保存さ

そうです。採取時にはお母さんに「いま、さい帯血をもらってますよ」と声をかけるそうですが、やはり生命の誕生という一大事の時に、さい帯血のことで覚えている方は少ないようです。

祝い膳サービスも

三宅医院に入院していた石崎由美子さんは千葉にお住まいですが、里帰り出産で第2子の男児を産み、さい帯血を提供しました。石崎さんは「できたら、さい帯血がどうなったかその行方を知りたい、そうすれば提供して良かったと思えるし……」と語っていました。

また、三宅馨院長も「妊婦さんに情報還元をしたい。元気な子を産んでいるのなら、明るい情報を提供できる」そして「さい帯血移植をした患者さんからのメッセージも届くといいのですが」との要望をお持ちでした。

分娩室を「出産室」と呼ぶなど、三宅医院にはいろいろとこだわりがあるようです。入院中に一度、他の妊婦さんとフランス料理を楽しみながら情報交換したり、家族と一緒に「祝い膳」のサービスがあるなど、ユニークな産院でした。

業務量増加に慣れ

広島の採取施設としては日赤原爆病院（広島市中区）をお訪ねしました。原爆病院は骨髄移植やさい帯血移植も行う移植病院でもあることから、産婦人科ではさい帯血バンクの

さい帯血のデータを公開して誰でもが検索できるシステムは世界的にも画期的なシステムでした。

そのホームページを一新します。スタートは2月20日です。

採取施設となる前から血縁者間の移植のため、さい帯血の採取保存を行っていたそうです。出産数は年間360前後、そのうち3分の1の出産でさい帯血を提供してもらっています。

「週末の出産でもさい帯血の分離保存を受け入れてくれればもっと採取できるのですが」と語る小川達博部長は、さい帯血バンクの採取病院として出産記録などの様々な文書提出の仕事が増えたことについて「最初は面倒で大変でしたが、もう慣れましたから」と言います。

切迫早産でも同意

でも、この件については妊婦さんも同様です。普通はあらかじめ書類をもらって、入院時に同意書や家族調査票を持ってくるのですが、他院からの紹介により切迫早産で緊急入院した伊達比早代さんは、出産間際でもさい帯血の提供に同意しました。



初産で女兒を出産した伊達さん

「もう陣痛が始まっていて、痛い思いをしながら同意書にサインしたんです」という体験をしたそうです。皆さん、さい帯血バンクにご協力ありがとうございます。

次号から新連載 「採取病院訪問記」は今回で終了します。次号から「さい帯血バンクの工具箱」です。

ご寄付をいただきました

村田雪江様（福岡県） 1万円
匿名希望（静岡県） 1万円

善意をお待ちしています